

交通事故はもう、いらない

楽しい日になるはずだった。
交通事故を起こすまでは…。

その日は一生に一度の成人式でした。式は午前中に終わり、一旦自宅に帰りました。夕方になり二次会の会場に向かいました。到着してみると、まだ参加者が集まっております。友人2人にドライブに誘われ私の車で出かけることになったのです。

友人を助手席と後部座席に乗せ、車のほとんど通らない道を走っていました。気分が高まっていた私は、見通しのよくなった直線でスピードを出し過ぎてしまいました。前方にカーブが見え、ハンドルを切りブレーキを踏んだのですが手遅れでした。

車は道路外へはみだし、一回転して、すごい衝突とともに田の中で止まりました。あわてて周りを見渡すと、助手席の友人はシートベルトを着用していたため無事だったのですが、後部座席の友人の姿が見当たらないのです。

車を降り友人を探すと、数10メートル先に倒れていました。必死に声を掛け続けたのですが、何の反応もありませんでした。救急車が到着し、友人は運ばれて行き

ました。私と助手席の友人は、別の病院に運ばれました。

早朝、両親が来てくれました。そして、友人が亡くなったと聞かされたのです。目の前が真っ暗になりました。現実だと信じられぬまま退院し、亡くなった友人宅へ私と両親、助手席に乗っていた友人とその両親で向かいました。ここには友人の変わり果てた姿があり、ご家族の方々が泣いておられました。泣いている方々のこと、一緒になって頭を下げ続けてくれている家族のこと、何も悪くない友人と家族のこと、私はどうやって償えるでしょう。

私は逮捕されました。

死んでお詫びをしようと何度考えたことか。でも、そのとき一緒に泣いてくれた私にとって大切な人の言葉によって考え直しました。今は亡くなった友人の無念さを胸に刻み、精一杯生きていこうと思います。

この手記は、交通事故の被害者となり市原刑務所に服役し、重荷を背負ってこれからの生活を送ろうとしている受刑者の記録です。(交通事故被害者の手記「贖いの日々第43集」(財団法人東京安全協会発行)より抜粋。

なくならない交通事故

事故を起こし、
一生を棒に振る加害者。
一瞬にして大切な人を奪われ
悲しみを背負う家族。

家族の悲しむ顔は
誰だって見たくありません。
なのになぜ、
交通事故はなくならないのか。

今、

何が起きているか

伊予署管内で
2週間に3人死亡

5月中に県内で起きた交通死亡
事故は4件。そのうち3件が、伊
予署管内で起きた事故でした。
これらの事故について、伊予警
察署の水木一馬交通課長は次のよ
うに話します。

「交通事故は、注意を呼び掛け
ることで抑止できます」と話す水
木課長。

警察や行政は、さまざまな場面
で交通事故防止の取り組みを行っ
ています。

交通事故を
なくすための行動

交通ルールを守らないこと
が交通事故に直結

「県内で目立つのが運転手のマ
ナーの悪さです。横断歩道は歩行
者優先なのに、子どもが立ってい
ても停まらない。歩行者妨害こ
そ、交通事故につながります。交
通ルールを守らないことが事故に
直結するということを自覚してほ
しい。信号無視や一時停止の取り
締まりをするのはそのためです。
交通ルールは誰もが守らなけれ
ばなりません。小さいときから交
通ルールを身につけてもらいた
め、保育所や学校では交通安全教
室を開催しています。地域では、
最近事故が増えている電動車いす
の講習を行っています」

5月の死亡事故概況

日時・場所	状況
5月5日 7時50分ごろ 松前町東古泉 国道56号	原付(73歳男性)が右折中、 対向直進の大型バイク(38歳 男性)と衝突。原付を運転し ていた男性が死亡。
5月15日 22時30分ごろ 中山町中山 国道56号	普通乗用車(21歳男性)が右 折中、右方から直進してきた 125ccのバイク(31歳男性)と 衝突。バイクを運転していた 男性が死亡。
5月18日 11時30分ごろ 伊予市市場 国道56号	軽トラック(75歳男性)が、信 号待ち車両3台に追突。運転 していた男性が死亡。

資料：伊予警察署



伊予警察署
水木 一馬 交通課長

「2週間に3件の死亡事故…。
伊予署管内で短期間の内にこんな
に事故が続くことはありませんで
した。3件とも、発生場所は国道
56号の交差点で、原因は安全確認
不足です。これらの事故からも分
かるように、事故の発生場所の多
くは、交差点とその付近です。そ
の割合は全事故の約60%になりま
す。

事故原因のほとんどは、前方不

注視や安全不確認です。交通事故
は、一人一人の意識で防ぐことが
できます。ドライバーの皆さんに
は、とにかく交差点での安全確認
を徹底していただきたい」

被害者・加害者ともに
高齢者の事故が増加

発生場所は交差点が、原因は安
全不確認が多いという交通事故。

「松前町は、2人の女性サポー
ターが活動しています。交通事故
は、免許を持っている人や交通
安全の意識の低い人が被害に遭う
ことが多いです。安全意識のあ
る人は、交通安全教室に参加して
くれる。参加してもらえない人の
ために、こちらから出向いてみん
なの意識を高めることが、この制
度の大きな役割です」

交通事故は過失
気のゆるみが凶器に

本年5月末現在、伊予署管内で
発生した交通事故は170件、死
者は4人。前年より、発生件数、
死者数ともに増えています。

訪問時は、できるだけ
長い時間をかけて皆さんの
状況を聞きます。回っても事故、回っても事故では
悲しいですから。「スピード
を出している車が多くて怖い」という高齢者が多いで
す。ドライバーの皆さんに
は、高齢者の安全確保を
お願いしたいですね。



高齢者安全安心
サポーター
岸本 美代子さん

訪問して「自分は丈
夫夫と思っている人が多い」と感じます。交通事故
は「自分には関係ない」で
はありません。他人事では
なく、自分が当事者である
ことを意識付けして、習慣
化してもらうためには、家
族や地域での繰り返し
の「呼び掛け」が大切です。



高齢者安全安心
サポーター
山中 広美さん



1 交通安全教室で、交通安全について子どもたちに語りかけるように話す教頭先生

2 実際に学校周辺の横断歩道を渡る1年生

3 集団下校時、全員で『交通安全3つの誓い』を誓う



北伊予小学校
山本 照夫 教頭

1

守りたい いのちがある

さっきまで一緒に過ごしていた娘が、
突然いなくなるなんて信じられなかった。

5月11日、北伊予小学校で交通安全教室が行われました。交通ルールやマナーを学び、学校の周りを実際に歩いて学習し、最後に山本照夫教頭先生からお話がありました。

「事故はいつ、誰の身に起こるか分かりません。先生の娘は、ある日突然、交通事故で死んでしまいました。みんな、いのちはひとつです。交通ルールを守って、大切ないのちを守りましょうね」

当時高校2年生だった娘を交通事故で亡くされた教頭先生。今回、本紙の趣旨をご理解いただき、後日、事故の話を聞かせていただきました。

「わが子が親より先にいなくなる。こんなに悲しいことはありません」

教頭先生は今でも、早すぎる娘の死と闘いながら生きています。

17年前のことです。娘は、学校から帰った後、友達とカラオケに行つてくると言つて家を出ました。

その日の深夜12時ごろでした。電話が鳴ったんです。電話に出たのは家内でした。

「娘さんが交通事故に遭いました。南署まですぐ来てくださーい」

警察からの連絡でした。慌てて家内と2人、南署に向かいました。

南署に着いて、事故の概要も聞かされないまま、部屋に案内されました。真つ暗な部屋には、黒いビニール袋がありました。娘が、包まれていました。今でも、あのビニール袋のある安置室の風景が頭から離れません。

事故が起きたのは国道33号。スピードの出し過ぎが原因でした。運転していたのは20歳の男性。娘のほかに女の子2人が乗っていました。2人とも亡くなり、運転手は生死に別状ありませんでした。

何も考えられませんでした。さっきまで一緒に過ごしていた娘が、突然いなくなるなんて信じられませんでした。お葬式するとき「娘さんの好き

たんです。

何ででしょうね。自分でも不思議です。北伊予小学校は、見守り隊、青パト隊、PTAの登校指導と、地域の人がしっかりと子どもたちを見守ってくれています。

それでも、交通事故や不審者情報が多く学校に入ってくる。だから、子どもたちに伝えたかったのかもしれない。地域の人や家族は、いつもいつも、四六時中見守ってくれるわけじゃないということを。子どもたち一人一人の心掛けが大事だ

取材を終えて

伊予署管内で2週間に3件の交通死亡事故が発生したことをきっかけに、「松前町で被害者も加害者も出さないよう、広報で何か呼び掛けることはできないか」という思いで、今回の特集に取り組みました。

交通事故は、誰だって起こしたくて起こしているわけではありません。一人一人の意識が大切だということだっています。

それでも、交通事故がなくなるのは「事故の本当の怖さを知らないから」「自分だけは大丈夫と思っているから」。

今回は、被害者の家族の声を聞かせていただきました。先生は、事故のことを言葉を一つ一つ探しながら、ゆっくりと話してくれました。静かに流れる時間の中で、言葉では伝わらないことがあることを思い知った瞬間でした。

交通事故は もう、いない。

だった歌をかけましょう」と、葬儀社の人に言われました。わたしはよくわからんから、家内が選んでかけました。歌うことが好きな娘でしたけど、わたしと一緒にカラオケに行ったことがありませんでした。

葬儀には、たくさん娘の友だちが来てくれて、亡くなった娘のことを話してくれました。「まったく娘のことを知らなかったな」

あとになって、そう思いました。

喪主のあいさつで、わたしは何もしゃべれませんでした。

事故後は、運転手本人にも家族にも会っていません。家内もそうだけど、運転手をどうしたとかはありませんでした。

子どもが、わが子が、親よりも先にいなくなる。こんなに悲しいことはありません。ただ、それだけです。力が入らなくて、夜もぼんやりと目覚めることが多かった。とにかく辛い日々が続きました。

わが子のことを、子どもたちの前で話したのは、初めてでした。これまで、どこの学校でも交通安全を呼び掛けてきたのに、一度も話したことがなかつ

たいうことを。

子どもたちが誓う『交通安全3つの誓い』。道路では遊びません。飛び出しはしません。自転車は正しく乗ります。頭ではわかっていても、習慣にできていないかといえばそうじゃありません。

車の怖さを知っても、いのちの重さを知らなければ習慣にはできない。自分の経験上、どうしても子どもたちみんなに、あなたたちを大事に想っている人がいるということを、伝えられたんです。